

平成29年5月16日(火)

老球の細道326号

トステイン須賀川クリニック雑感

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

ゴールデンウィーク真最中の5月4日(木)5日(金)に須賀川バスケットボール協会主催(鈴木利弘会長)の「トステイン・クリニック」が須賀川一中で開催された。連休中にもかかわらず福島や会津からも多くの指導者や選手が参加して盛大に実施された。須賀川バスケットボール協会設立50周年記念行事の一環だった。

勝敗よりも基礎、バスケットボールの楽しさを選手に伝える指導理念を持つ鈴木利弘夫妻と保護者の方々の熱意でこのクリニックが開催されたことは非常に喜ばしいことである。今回の須賀川開催を機にトステイン氏の指導の素晴らしさが、会津のみならず福島県全体に広まってほしいと思う。鈴木夫妻の英断に心から敬意を表したい。

トステイン氏は現在日本のアンダーカテゴリー代表チーム、選手の指導に携わっているが、代表レベルの選手しか経験できない指導を今回参加したミニから高校まで多くの選手達が経験できたことは貴重な経験ができたことだろう。今回のクリニックのテーマは現在日本代表が抱えている課題に関連するファンでメンタルをとりあげた。

日本のバスケットボールは体格で勝てないので動きで圧倒する「ペースアップバスケットボール」をしなければならない。そのための「動きの学習を速いレベルで」「スキルの質を高いレベルで」「ケガのリスクを低いレベル」というコンセプトを示してくれた。そして、この三つの課題を克服するために、一つのドリルを少ない練習回数で、ドリルに集中させ、精度を上げるよう努力させることが重要だという。このような着眼点に接することができるのもトステインクリニックの素晴らしさである。他にも下記のような感想を。

- ①トステインスタイルの徹底。集中力を維持する拍手で選手のモチベーションを上げながら、体育館にいるすべての人たちをトステインの指導ペースに巻き込んでしまう。定番のプッシュアップも不変である。私は参加するたびに胸囲が増している。
- ②ドリルのスタイルを変えないで負荷を上げていく絶妙な段階的指導。一つのドリルスタイルを基盤にして数多くのバリエーションドリルがクリエイティブされる。選手は飽きない、私たちコーチも飽きない。ドリルの引き出しの多さ、アイデアには脱帽する。
- ③常にスマイルとユーモアを交えながら難しいスキルを簡単に、面白くしながら、選手のモチベーションをあげ、短時間で上手にしてしまうコーチングスキルはまさにプロフェッショナル。ドイツからまっすぐ須賀川に来て2日間疲れる様子を少しも見せず、大きな声を張り上げながら指導するタフさも相変わらずだった。

日本のバスケットボールはジュニア期は世界でも高いレベルにあるが、シニアになるにつれて徐々に低レベルになってしまい世界では勝てなくなってしまうと言われている。原因はミニ、ジュニアの時代の勝つことを優先させた指導にあるようだ。選手が考えないで指示待ち状態になる。自分で考えない、自主性の欠けた選手は将来的には伸びていかない。それに反して、楽しいバスケットボールを指導された選手は自立、自律した選手に育つ。自分で考えながら意欲的に取り組む選手は進歩は遅いかもかもしれないが、将来は上達する。

閉講式である高校の代表が御礼の言葉を述べた。「今までバスケットボールの練習をやってきて最高に楽しかった2日間でした」。何ごともしんで励む人にはかなわない。